

平成 21 年 5 月 19 日現在

研究種目：若手研究 B
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19791750
 研究課題名（和文） 認知症高齢者の QOL を高めるための被服行動への介入研究
 研究課題名（英文） Interventional Study to Clothing Behavior to Improve QOL of the Elderly with Dementia

研究代表者
 温水 理佳（NUKUMIZU RIKA）
 岐阜大学・医学部・助教
 研究者番号：90402164

研究成果の概要：

今後の認知症高齢者に対する被服行動への介入方法を検討するため、まずは先行研究がなかったため現状の高齢者の被服行動についての調査をおこなった。結果から、認知能力に大きな問題がない高齢者については、加齢などによる被服に関する行動の変化は見られないことが分かった。また認知症となることで被服に関する行動は影響を受けて行動が変化することが分かった。しかし認知レベルや援助などによって維持できる行動もあるのではないかとということが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,400,000	0	1,400,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	300,000	2,700,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：老年看護学

1. 研究開始当初の背景

現在の日本は、ほぼ 5 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者であり、そのなかの 13～14 人に 1 人が認知症であるといわれている。今後の高齢者人口の増加とともに、認知症高齢者はますます増加していくと考えられている。認知症そのものの治療・薬物療法が確立されていない現状では、その症状の改善や進行を遅らせるために、非薬物療法（回想法、音楽療法、学習療法、見当識訓練、アニマルセラピー、園芸療法など）がひろく行われている。しかしそれぞれ独自のプログラムや介入で

あるため、その効果のエビデンスが不明確であるものが多い。

今後も認知症の症状を改善し進行を遅らせるような方法を探究する努力が必要であるが、その基本となるのは、安定した日常生活活動であると考えられる。しかし、認知能力の低下に伴って身の回りのことを自分で行うことが困難となってくる。中でも被服行動というものは、その生活の安定のために重要な役割を担っていると考えるが、現状では援助や介助をする側にとって都合のよい被服となっていることが見受けられる。

このような現状をみて、認知症高齢者は自分の被服に満足しているのか？また、適切でない被服行動によって、かえってBPSDなどをひきおこすようなことになってはいないのか？という疑問をもった。

これまでも社会学分野、心理学分野、家政学分野などで、高齢者の被服行動に関する研究は行われている。これらの研究は、高齢ではあるが認知能力に問題がなく、自宅などで生活を営むことに大きな問題がない方々を対象として調査したものがほとんどである。

看護学分野でも高齢者と被服行動に関する研究は行われているが、(施設入所高齢者のおしゃれへの関心と動機、石塚敦子 他、順天堂大学医療看護学部医療看護研究、2(1)、2006年)など、少数である。内容は対象の高齢者それぞれを調査・分析したものが多く、そのため結果や考察が個別のケースに関して述べられるにとどまっている。

つまり被服行動に関する本人の意思を確認することが困難であると思われ、また被服行動に対して望むような行動を自らとることが困難であると思われる、認知症をもった高齢者の被服行動やそれに関する要因は、まだ明らかにされていないのが現状である。

またこれから日本では、団塊の世代が高齢となっていく。この世代は「おしゃれを楽しむことを知った最初の世代」で「自分のスタイルを主張する傾向」があるといわれている。伝統的なものにとらわれない生き方を取ってきた世代であるため、前世代までの年齢相応の地味な服飾の着用傾向を継承せずに、独自の傾向をみせることは充分予想される(被服と化粧の社会心理学、高木修 他、北大路書房、1996年)。これまでの明治・大正・昭和初期に生まれ育った高齢者とは、明らかに生活や文化、価値観が異なっている世代の高齢化をむかえるにあたり、これまでの介入や援助を見直す必要がある。そのなかで被服行動の位置づけも今以上に重要になると思われるため、被服行動に関する研究を行っていく意義があると考えられる。

2. 研究の目的

被服行動に関する本人の意思を確認することが困難であると思われ、また被服行動に関して望むような適切な行動を自らとることが困難であると思われ、認知症をもった高齢者の被服行動やそれに関連する要因は、まだ明らかにされていない。

そのため本研究では、高齢者が認知症となる以前に自ら行っていた被服行動と、認知症となった後にどのような被服行動をとるよ

うになったのか、その変化に着目することで、高齢者が認知症となったときに被服行動に影響する要因を調べることを目的とする。

現在のところ認知症高齢者を対象とした化粧療法などが施設などで行われており、その効果が発表されている(痴呆性高齢者のための包括的心理療法 化粧療法を中心として、原千恵子、心理臨床学研究、22(5)、2004年)。これら研究では認知症高齢者の反応として、気分や表情を明るくする、自発性が増すなどの効果が発表されている。

化粧行動はひろく被服行動に含まれることから、認知症高齢者の被服行動に対して適切な介入を行うことで同様の効果が得られる可能性があると考えられる。そこで認知症高齢者が適切な被服行動をとることができる環境づくりなどへの介入を行うことで、高齢者のQOLを高めることにつなげていけるのではないかと考える。

3. 研究の方法

調査対象者は一般高齢者(認知症でない60歳以上の高齢者)と、認知症高齢者(20歳以上の家族または近親の者が回答)とした。両者とも、ある中堅都市周辺に現在居住している者を対象とし、性別や同別居の有無、住宅環境や世帯などは対象条件として問わなかった。

データ収集は高齢者が利用している施設や所属している団体に研究内容を説明し、協力を依頼した。調査票の配布先は病院、介護老人保健施設、グループホーム、デイケア・デイサービス、老人クラブ、認知症の人と家族の会などであった。

調査内容は以下にあげるものである。

(1) 一般高齢者への調査内容

①基本属性

性別、年齢、家族状況、生活状況、住宅の形態、既往歴、介護認定など

②被服行動尺度(永野、1994年)

被服行動の「選択・購入(入手)」「使用・着用(消費)」「廃止・廃棄」という3つの側面のうち、「選択・購入」と「使用・着用」の行動様式を測定する尺度を用いた。

③被服に関する行動

被服行動尺度だけでは、その質問項目の内容から、日々の実際に行われている高齢者の被服行動を明らかにすることは難しいと考え、より具体的に明らかにするために被服に関する行動についての調査票を作成した。前述の被服行動の3側面から先行研究を参考にし、9項目をだした。

①衣服の入手：衣服をどのようにして手に入

れますかと尋ねて、回答は「家族が手にいれる」「自分で手にいれる」「その他」の3つの選択肢とした。

②衣服の値段：衣服のほしいの値段を知っていますかと尋ねて、回答は「知っている」「だいたい知っている」「あまり知らない」「知らない」の4つの選択肢とした。

③衣服の区別：汚れた衣服と清潔な衣服の区別はどうですかと尋ねて、回答は「自分で間違えずに区別する」「家族と一緒に区別する」「家族が区別する」「その他」の4つの選択肢とした。

④衣服の片付け：衣服をタンスや押し入れなどに片付けますかと尋ねて、「自分で片付ける」「家族と一緒に片付ける」「家族が片付ける」「その他」の4つの選択肢とした。

⑤起床時と就寝時の着替え：起きている時と寝ている時とで服を着替えますかと尋ねて、「毎日着替える」「だいたい着替える」「ときどき着替える」「着替えない」の4つの選択肢とした。

⑥毎日の着替え：起きている時の衣服は毎日着替えますかと尋ねて、「毎日着替える」「だいたい着替える」「ときどき着替える」「着替えない」の4つの選択肢とした。

⑦普段着の選択：普段着る服は誰が選びますかと尋ねて、「家族が選ぶ」「自分で選ぶ」「その他」の3つの選択肢とした。

⑧着替え：衣服はひとりで着替えますかと尋ねて、「ひとりで間違えずに着替える」「家族などが手伝う」の2つの選択肢とした。

⑨脱衣：衣服はひとりで脱ぎますかと尋ねて、「ひとりで脱ぐ」「家族などが手伝う」「その他」の3つの選択肢とした。

これら9つの被服に関する行動において全く同じ質問項目内容でそれぞれ、「若いとき(むかし)」という過去での行動の回答と、「現在の状態(いま)」の行動での回答を得た(以下、「若いとき(むかし)」を「過去」、「現在の状態(いま)」を「現在」と表す)。

(2) 認知症高齢者への調査内容

①基本属性

認知症高齢者の性別、年齢、続柄、同別居の有無、介護認定(認定の有無と等級)、既往歴など。

家族などの調査回答者の性別、年齢、家族状況、生活状況、住宅の形態など。

②柄澤式老人知能の臨床的判定基準(柄澤、1989年)

認知症高齢者の知能レベルのおおまかな段階付け評価を行うため用いた。

③被服行動尺度

④被服に関する行動

分析については、一般高齢者では、フェースシートの質問項目で介護認定を受けてい

ると回答したものを、認定の等級に関わらずすべて除外した。認知症高齢者では、柄澤式判定について全く記載されていないもの、または正常と判定されるものを全て除外した。また、この判定は、ある領域の能力は保持され、ある能力は衰えている場合、衰えているほうのレベルで判定することから、複数回答の中でより能力が低下しているとされる選択肢をその認知症高齢者のレベルの判定として使用した。

被服に関する行動では、それぞれの質問項目での「過去」と「現在」の選択肢において、回答が異なっているものを行動に「変化あり」とし、回答が同じものを行動に「変化なし」として分析をおこなった。柄澤式判定と被服に関する行動についての分析の際には、判定基準において軽度(+1)と中等度(+2)であるものを軽中度とし、高度(+3)と最高度(+4)であるものを高度以上として検定に用いた。また一般高齢者と認知症高齢者の被服に関する行動の分析の際には、両群の75歳以上の女性での検定を行った。認知症高齢者の「過去」と「現在」の被服に関する行動の変化については、女性での分析を行った。被服行動尺度については、4つの尺度ごとに5つの項目の得点を単純合計して分析に用いた。

データの分析は研究目的に従い、t検定、被服に関する行動での「過去」と「現在」の行動の分析には McNemar 検定、一般高齢者と認知症高齢者との比較については χ^2 検定を用いた。統計解析ソフトとして SPSS Version 15.0J for Windows を使用した。

倫理的配慮としては、研究参加者には文書にて研究の目的および方法、研究者の身分などの説明を行った。本研究に関する参加協力は自由であること、個人が特定されないこと、目的以外にデータを使用しないこと、回答の部分的な拒否や中途でも参加の拒否が可能であること、データの処理や保管には細心の注意を払うことなどを明記した依頼書を添付した。調査票の配布と回収は、協力を得られた施設や団体の職員などに依頼した。回答者からの調査票の記入と回収をもって、研究協力の同意とみなしデータとした。

4. 研究成果

一般高齢者では、調査票の配布数 279 で回収数 161、回収率は 57.7%であった。回収した調査票から、介護認定を受けていると答えた高齢者を、等級に関わらず全て除外した 131名(81.37%)が分析対象となった。認知症高齢者では調査票の配布数 169 で回収数 52、回収率 30.8%であった。回収した調査表から、柄澤式老人知能の臨床的判定基準が記載さ

れていないもの、正常と判定されるものを全て除外し、41名(78.85%)が分析対象となった。

一般高齢者と認知症高齢者の背景は表に示すような結果となった。

		人数	%
年齢	平均年齢	全体	72.74(±5.16)
		男性	75.92(±6.36)
		女性	72.38(±4.91)
性別	男性	13	9.9
	女性	118	90.1
居住形態	同居	103	78.6
	別居	21	16.0
住宅	持家	128	97.7
	借家	3	2.3
世帯	一世代	28	21.4
	二世帯	24	18.3
	三世帯	27	20.6
暮らし向き	余裕がない	16	12.2
	少し余裕がない	21	16.0
	少し余裕がある	75	57.3
	余裕がある	12	9.2

		人数	%
年齢	平均年齢	全体	82.95(±7.32)
		男性	81.50(±6.85)
		女性	83.32(±7.50)
性別	男性	10	24.4
	女性	31	75.6
居住形態	同居	21	51.2
	別居	17	41.5
住宅	持家	37	90.2
世帯	一世代	8	19.5
	二世帯	14	34.1
	三世帯	13	31.7
暮らし向き	余裕がない	3	7.3
	少し余裕がない	6	14.6

少し余裕がある	21	51.2
余裕がある	2	4.9
柄澤式老人知能の臨床的判定基準		
軽度(+1)	8	19.5
中等度(+2)	10	24.4
高度(+3)	11	26.8
最高度(+4)	12	29.3
男性		
軽度(+1)	3	30.0
中等度(+2)	4	40.0
高度(+3)	2	20.0
最高度(+4)	1	10.0
女性		
軽度(+1)	5	16.1
中等度(+2)	6	19.4
高度(+3)	9	29.0
最高度(+4)	11	35.5

一般高齢者の過去と現在の被服に関する行動について分析を行い、表のような結果を得た。

9つの項目(衣服の入手、衣服の値段、衣服の区別、衣服の片付け、起床時と就寝時の着替え、毎日の着替え、普段着の選択、着替え、脱衣)すべてにおいて、いずれも過去と現在の被服に関する行動では変化がないという結果であった。これらの結果から、認知能力に大きな問題がない高齢者では、年齢に関わらず以前と変わらない被服に関する行動をし続けることができることが分かった。

表3 一般高齢者の過去と現在の被服に関する行動

	過去	現在				P
		a	%	b	%	
1 衣服の入手	家族が	3	60.0	2	40.0	ns
	自分で	1	0.9	107	99.1	
2 衣服の値段	知っている	87	94.6	5	5.4	ns
	知らない	8	33.3	16	66.7	
3 衣服の区別	自分で	107	96.4	4	3.6	ns
	家族または家族が	1	14.3	6	85.7	
4 衣服の片付け	自分で	107	98.2	2	1.8	ns
	家族または家族が	0	0.0	11	100.0	
5 起床時と就寝時の着替え	着替える	107	97.3	3	2.7	ns
	着替えない	5	41.7	7	58.3	
6 毎日の着替え	着替える	108	99.1	1	0.9	ns
	着替えない	2	16.7	10	83.3	
7 普段着の選択	家族が	4	100.0	0	0.0	ns
	自分で	4	3.4	112	96.6	
8 着替え	ひとりで	102	100.0	0	0.0	ns
	家族が手伝う	0	0.0	0	0.0	
9 脱衣	ひとりで	108	100.0	0	0.0	ns
	家族が手伝う	1	50.0	1	50.0	

※「現在」の列の項目

	現在	
	a	b
1 衣服の入手 7 普段着の選択	家族が	自分で
2 衣服の値段	知っている	知らない
3 衣服の区別 4 衣服の片付け	自分で	家族とまたは家族が
5 起床時と就寝時の着替え 6 毎日の着替え	着替える	着替えない
8 着替え 9 脱衣	ひとりで	家族が手伝う

また一般高齢者でのそれぞれに被服に関する行動について、性別による差があるのかどうかを調べた。結果は表に示すように、項目によって違いがみられた。

表4 一般高齢者の性別と被服に関する行動

		変化				χ^2
		あり	%	なし	%	
衣服の入手	男性	2	18.2	9	81.8	7.74*
	女性	2	1.9	101	98.1	
衣服の値段	男性	3	27.3	8	72.7	1.03
	女性	15	15.3	83	84.7	
衣服の区別	男性	3	25.0	9	75.0	10.98*
	女性	3	2.8	103	97.2	
衣服の片付け	男性	3	25.0	9	75.0	27.69**
	女性	0	0.0	108	100.0	
起床時と就寝時の着替え	男性	0	0.0	12	100.0	0.93
	女性	8	7.3	102	92.7	
毎日の着替え	男性	2	16.7	10	83.3	2.18
	女性	6	5.5	103	94.5	
普段着の選択	男性	2	16.7	10	83.3	7.35*
	女性	2	1.9	106	98.1	
着替え	男性	0	0.0	13	100.0	-
	女性	0	0.0	89	100.0	
脱衣	男性	0	0.0	13	100.0	0.14
	女性	1	1.0	96	99.0	

*p<0.05 **p<0.01

行動の中で、たとえば衣服の片付けという行動では、男性は「変化あり」が3名(25.0%)、「変化なし」が9名(75.0%)であるのに対して、女性は「変化なし」が108名(100.0%)で、男性の「変化あり」が有意(p<0.05)に多い結果となりました。このように、衣服の入手、衣服の区別、衣服の片付け、普段着の選択という4つの行動について、男性の「変化あり」が女性に比べて有意に多い結果となった。現在60歳代から80歳代の高齢者が生きてきた時代背景や文化・価値観などから、これらは男女の性別役割として行われてきたことが考えられ、性別分業意識によって違いが表れたものとする。

一般高齢者と認知症高齢者との被服に関する行動については、以下の表のような結果となった。

表5 一般高齢者と認知症高齢者との被服に関する行動

		変化				χ^2
		あり	%	なし	%	
衣服の入手	一般高齢者	4	3.5	110	96.5	65.45*
	認知症高齢者	23	62.2	14	37.8	
衣服の値段	一般高齢者	18	16.5	91	83.5	28.36*
	認知症高齢者	22	62.9	13	37.1	
衣服の区別	一般高齢者	6	5.1	112	94.9	71.07*
	認知症高齢者	25	69.4	11	30.6	
衣服の片付け	一般高齢者	3	2.5	117	97.5	75.14*
	認知症高齢者	23	63.9	13	36.1	
起床時と就寝時の着替え	一般高齢者	8	6.6	114	93.4	20.53*
	認知症高齢者	12	36.4	21	63.6	
毎日の着替え	一般高齢者	8	6.6	113	93.4	23.66*
	認知症高齢者	13	39.4	20	60.6	
普段着の選択	一般高齢者	4	3.3	116	96.7	62.01*
	認知症高齢者	20	58.8	14	41.2	
着替え	一般高齢者	0	0.0	102	100.0	66.27*
	認知症高齢者	20	55.6	16	44.4	
脱衣	一般高齢者	1	0.9	109	99.1	65.77*
	認知症高齢者	20	55.6	16	44.4	

*p<0.01

認知症高齢者では一般高齢者と比べて被服に関する行動において「変化あり」が有意に多いことが分かった。さらに女性認知症高齢者における柄澤式判定の軽中度と高度以上の被服に関する行動を比較した。

表6 女性認知症高齢者における柄澤式判定軽中度と高度以上の被服に関する行動

	柄澤式老人知能 の臨床的判定基準	変化			χ^2	
		あり	%	なし		
衣服の入手	軽中度	6	54.5	5	45.5	1.98
	高度以上	15	78.9	4	21.1	
衣服の値段	軽中度	4	36.4	7	63.6	10.92*
	高度以上	16	94.1	1	5.9	
衣服の区別	軽中度	4	36.4	7	63.6	14.42**
	高度以上	17	100.0	0	0.0	
衣服の片付け	軽中度	5	45.5	6	54.5	8.44*
	高度以上	16	94.1	1	5.9	
起床時と就寝時の着替え	軽中度	2	18.2	9	81.8	2.71
	高度以上	7	50.0	7	50.0	
毎日の着替え	軽中度	5	50.0	5	50.0	0.91
	高度以上	5	31.3	11	68.8	
普段着の選択	軽中度	3	27.3	8	72.7	12.24*
	高度以上	14	93.3	1	6.7	
着替え	軽中度	3	27.3	8	72.7	8.50*
	高度以上	14	82.4	3	17.6	
脱衣	軽中度	3	27.3	8	72.7	8.50*
	高度以上	14	82.4	3	17.6	

*p<0.01 **p<0.001

表のような結果から、衣服の値段、衣服の区別、衣服の片付け、普段着の選択、着替え、脱衣という6つの行動について、柄澤式判定軽中度と比べて高度以上の「変化あり」の人数が有意に多いことが分かった。衣服の入手、起床時と就寝時の着替え、毎日の着替えという3つの行動では有意差がみられないということが分かった。これらの結果から、高齢者は認知症となることで被服に関する行動は影響を受けるということが分かった。しかし、すべての行動が認知症の初期から影響を受けて行動が変化してしまうということではなく、認知レベルや援助によっては認知症となっても行動を維持できることが示唆されたと考える。

次に被服行動尺度の結果について示す。

表7 一般高齢者の被服行動尺度

	平均得点	標準偏差	
流行性尺度	21.76	7.08	n=93
機能性尺度	28.10	4.09	n=90
適切性尺度	28.16	4.42	n=85
経済性尺度	22.32	5.24	n=94

表8 認知症高齢者の被服行動尺度

	平均得点	標準偏差	
流行性尺度	13.31	6.85	n=36
機能性尺度	22.95	5.30	n=37
適切性尺度	24.12	5.32	n=34
経済性尺度	20.56	4.99	n=36

一般高齢者の被服行動尺度については、永野が1994年に大学生男女に行った調査と比較すると4つの項目とも大学生より平均得点が高い結果となった。本研究での男女比率が1:9であったことや、被服に関する行動の調査と理解した上で協力を得たことから、元々被服に関する意識が高い高齢者であったことが要因として考えられる。認知症高齢者については、本研究では高齢者の家族が客観的にみて回答したものであるため、この結果をその高齢者の被服行動と捉えることは困難であると考えられる。

本研究では前述のように、調査対象者として認知症高齢者自身に回答を得るような調査を行うことができないということでの限界があった。また今回は調査に計画時以上に時間がかかり、現状の結果を報告するに至った。今後は、認知症高齢者の被服行動の現状の把握から実際に介入を行い、介入による反応などの結果を得たうえで、効果的な介入方法の検討を行っていかねばならないと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

①温水理佳、山田紀代美、吉川美保、在宅高齢者の被服行動の現状、日本老年看護学会、2008年11月8日

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

温水 理佳 (NUKUMIZU RIKA)

岐阜大学・医学部・助教

研究者番号：90402164

(2) 研究分担者

研究者番号：

(3) 連携研究者

研究者番号：

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書